平成 29 年度地域学歴史文化研究センター個人評価報告書

1.　個人評価の実施状況

1) 対象教員数，実施者数，実施率

対象教員数（人）	実施者数（人）	実施率（%）
2 （准教授１、講師１）	2	１００

2) 教員個人評価組織と実施概要

評価組織	地域学歴史文化研究センター　評価委員会
構　成	宮武正登（全学教育機構教授／センター長） 重藤輝行（芸術・地域デザイン学部教授／センター考古学研究部門長） 中尾友香梨（全学教育機構准教授／センター国文・文献学研究部門長）

実施内容と方法：

①29 年度のセンター専任教員を対象とした。

②地域学歴史文化研究センター個人評価実施基準、同指針に基づき、評価項目とそれらの重みを各自が設定。

③実施対象期間は平成 29 年度とし、活動実績の様式に活動実績を記入し（添付資料で明らかな場合は必ずしも記入を要しない）、それに基づき自己点検・評価を行い提出。

④評価委員会を平成 30 年 11 月 29 日に開催し（出席者：宮武、重藤、中尾）、提出された評価資料をすべて点検・評価し、委員会の評価点、コメントを集約。センター評価委員会規程に従えば、伊藤昭弘副センター長／地域史・史料学研究部門長、三ツ松誠洋学・思想史研究部門長も委員に含まれるが、当人は評価の対象であるため今回は委員会から外した。

2.　評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 研究の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①著書・論文

・専任教員２名ともそれぞれ地域学創出に関わる論文をまとめ、著書・紀要等で公表した。

②資料整理・目録づくり・展示等

・　それぞれの部門長として、地域資料の整理、目録づくりをすすめた。

・ 小城市との交流事業企画展については、専任教員２名が役割を補完し合って大きな成果をあげた。

③研究成果の公開・刊行

・ 小城市との共同研究の成果を展示図録として刊行した。

・ センターの研究紀要 12 号を刊行し、研究成果を公表した。

・ 資料集『阿蘭陀使節船渡来』を刊行した。

④各種研究費（研究助成等）応募

・１名が基盤研究（B)、1 名が若手研究（B）の研究代表者として、科研費助成を全員受けている。

2)研究の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均 95%であった。各評価項目ともおおむね目標を達成している。

・外部資金は 2 名全員が獲得している。さらなる外部資金獲得に挑戦する予定である。

3)研究の領域における部局等の自己点検評価

・少人数でありながら十分な業績を達成している。

(2) 教育の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①授業

・1 名が全学教育機構インターフェース科目、1 名が同・基本教養科目の授業を担当した。また芸術・地域デザイン学部の授業を、2 名で共同開講した。

②シラバス作成・公開

・授業を担当している 2 名はシラバスを作成し、公開し、ほぼそれにそった授業展開ができた。

③教育方法の改善

・パワーポイントやプリント、小テスト等の工夫に取り組んでいた。

2)教育の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均 95%であった。

・パワーポイントやプリント配布、歴史関連施設の見学等、教育方法の工夫改善に取り組み評価できる。

・全学教育機構の科目に積極的に取り組んだ。

3)教育の領域における部局等の自己点検評価

・本センターは研究センターであるが、本学の理念・目的のひとつである「豊かな教養と深

い専門知識を生かして社会で自立できる個人の育成」に貢献すべく、教養教育に積極的に取り組んでいる。また芸術・地域デザイン学部でも授業を担当し、センターの研究成果を教育活動に還元すべく取り組んでいる。そのほか全学教育機構の「地域・佐賀学」部会の運営に部会長として取り組んだ。

（3）社会貢献の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①自治体・学外研究者との共同研究、展示等

・ 小城市との交流事業企画展「鍋島元茂－父を支え、小城を領す－」を役割分担しつつ、共同研究により展示を実施した。
・ それぞれ自治体史編纂にかかわった。

②自治体・学会等の役員・委員など

・ 佐賀県における文化財関係委員活動が活発だった。

③公開講座・講演等

・ 全員が公開講座の企画・運営・講演などに貢献した。
・ 研究会での研究発表、学外からの依頼講演などを積極的に担当した。
・ 古文書講座など、佐賀県・佐賀市と協力した市民向け企画を担当した。

2)社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均 95％であった。
・公開講座をふくめ、地域貢献・社会貢献への十分の活動がみられた。

3)社会貢献の領域における部局等の自己点検評価

・どの項目も十分な活動実績がみられたが、とくに展示を通しての社会貢献度は高く評価されている。
・少人数の研究センターでありながら、全員が社会貢献領域の活発な活動を展開している。

(4)　組織運営の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

・センターの運営に関しては、全員がセンター会議、運営委員会に参加し、センター各部門の運営にも責任をもって当たっており、それぞれが業務を補完し合って協力し、個人ごとの目標達成度は高い。

2)組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均 95％であった。

・達成率が高いのは、センター設立から 12 年目にあたり、センター長のもとで、これまでの経験をもとに問題点を解消するなど､各自が組織運営に十分に努力してきたからである。

3)組織運営の領域における部局等の自己点検評価

・専任教員２名という極めて少人数の組織であり、全員が重要な業務分担をして運営にあたっている。過重な負担がやや認められるものの、協力しあって、良好に運営されている。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

１）総合的な集計・分析結果と部局等の自己点検評価

	平均
研究	95.0
教育	95.0
社会貢献	95.0
組織運営	95.0
平　均	95.0

・各教員の総合的な評価点（達成率）は 95.0%である。

・ 個々の教員は、研究・教育など着実に成果を挙げている

・ 社会貢献についても積極的に取り組んでいる。

・ 少人数であるため、各々自覚して組織運営に携わっている。

２）個人評価に関する構成員からの意見を調査している場合は，まとめたものを添付

・特に意見はなかった。

３）次年度の個人評価実施に向けての改善案が策定されていれば，それも記載

・特に意見はなかった。

４）段階評価試行結果の検討（意義，有効性，活用方法などに関して）及びこれに代わる総合的活動状況評価の集計・分析方法の提案など

・特になし。

以上